第63回数理社会学会大会（2017年3月14-15日）報告要旨集（萌芽報告）ウェブ公開版：2017.02.21.
・著作権保護のため、本要旨集の印刷および編集は不可となっています（閲覧のみ可）。
・本要旨集の無断転載を禁じます。
数理社会学会 http://www.jams-sociology.org/

萌芽的セッション（ポスター報告）I

3 月 14 日（火）13:20〜14:40（第 3 学舎 A204＋2 階ロビー）

1　Github 上のコミュニティにおける所有と貢献の関係がプロジェクトの活性化に与える影響

〇新井健太（芝浦工業大学）
中井豊（芝浦工業大学）

オープンソース・コミュニティの構造（所有と貢献の関係）がプロジェクトに与える影響について調査する．Github 上からデータを大量に収集し，開発者とプロジェクトの関係を相互的もしくは一方的な貢献などの単純な要素に分解し, コミュニティをそれらの要素の集積として観察した. その結果, 例えば, 一方的な貢献が多く見られるプロジェクトは活性化される傾向にあった.

2　ベルヌイ型意識分布生成モデルの構築に向けて

石田淳（大阪経済大学）

ベイズ統計モデリングを応用して，意識の分布を発生させる背後のメカニズムとして，確率 p のベルヌイ試行の蓄積を仮定する確率分布モデルによって, 観察される意識分布の説明を試みる. SSM データを用いた分析を行う.

3　一般的信頼は主観的ウェル・ビーイングをどのように高めるか—媒介効果の検討—

大﨑裕子（成蹊大学)

主観的ウェル･ビーイングを高める要因の一つとして一般的信頼のもつ効果が注目される一方で, 両者の間の具体的な因果プロセスはよくわかっていない. これには一般的信頼の多義性が影響している．そこで本報告では，一般的信頼と主観的ウェル・ビーイングの間にいくつかの媒介要因を含めたパス解析モデルを個人レベルデータにより検証し, 両者の間にどのような媒介効果がはたらいているのかを検討する.

4　ソーシャル・サポートについての年齢・時代・世代効果—ベイズ型コウホートモデルの適用—

〇菅野剛（日本大学）
中村隆（統計数理研究所）

日本家族社会学会の全国家族調査 NFRJ (1999，2004，2009 年)と，全国家族調査パネルスタディ NFRJ-08Panel (2009〜2013 年)を用いて，親・きょうだいなどの他者から得られる，相談・経済・人手についてのソーシャル・サポートの有無と，年齢やコウホートとの関連を示す．そして，年齢・時代・世代の効果について，ベイズ型コウホートモデル（中村 1982）によって得られる分析結果により，総合的な解釈を行う.

JAMS63

5　教室内活動に対する保護者の介入―中国における座席編成を事例として―

金怡甜（東京大学大学院）

本報告の目的は，教師の座席編成の方略に着目することを通じて，中国における保護者の学校への介入を通じた階層再生産プロセスを検討することである．中国においては日本と異なり，教師がすべての生徒の座席を決めることが一般的であるため，生徒の座席は教師の評価を反映していると指摘する研究もある（劉 2013）．そこで，本報告では，中国 J 市で行った質問紙調査の結果を分析し，座席を通じた階層再生産のプロセスを明らかにする．

6　コミュニケーションと共感の社会学（２）

志田基与師（横浜国立大学）

前回の報告に引き続き，コミュニケーションの「核心部分」を構成する，「ウソ」と「ヒミツ」を中心に考える．

7　調査現場における自由回答収集支援システムの構想―アフターコーディング作業の効率化と精度向上に向けて―

高橋和子（敬愛大学）

社会調査における自由回答のアフターコーディングでは，コード化に必要な情報が不足するためにコーダの作業負担が増えたり，コードが不明となる場合がある．そこで，あらかじめカテゴリが定義されている調査に限定されるが，回答が情報不足であると判断された段階で，必要な情報を得るための質問を提示するシステムを開発予定である．本システムの処理には自然言語処理とルールベース手法を適用するが，入出力画面を含め詳細な仕様は検討中である．

8　ライフコースとパートタイム労働者の職業満足度―ライフステージに基づいた非正規キャリアに注目して―

○田上皓大（上智大学大学院）
竹ノ下弘久（上智大学）

本研究では，日本的雇用慣行に基づいた理想的なキャリアコースを正規キャリアと見なしたうえで，その過程にある様々なライフステージに着目し，非正規参入の複数の経路を示し，非正規労働者を新たな視点から概念化する．そして，一般的な非正規雇用形態であるパートタイム労働に注目し，カテゴリー別に職業満足度の比較を行う．どのライフステージで非正規へ参入するかによって，同じパートタイム労働者であっても職業満足度にどのような相違がみられるか検討する．

JAMS63

9　繰り返し囚人のジレンマにおける復帰可能な退出戦略の状態遷移分析

○田口拓哉（芝浦工業大学）
武藤正義（芝浦工業大学）

復帰可能な退出を含む IPD の進化シミュレーションにおいてマルコフ戦略に限定すると，Pavlov 戦略が勝ち上がることが分かってきたが，そのメカニズムはあまり明らかにされていない．進化過程では，①「自分と同じ戦略との対戦」でお互いが利得を稼ぎ，②「自分と違う戦略との対戦」で相手より利得を稼ぐ必要がある．上記のメカニズムを明らかにするため，主に①にしぼって状態遷移行列を用いた分析を行った．その結果，勝ち上がるためには「非効率的なループを持たない」などが必要なことが分かった．

10　職業別犯罪被害率の検討

○太郎丸博（京都大学）
谷口祐那（京都大学）
阪口祐介（桃山学院大学）

『平成 24 年の犯罪』に記載の職業別（31 分類）犯罪被害数を，同年の各職業従事者数で割って，職業別犯罪被害率を推定した．その結果，職業威信スコアの高さは犯罪被害率とほとんど関係がなく，日常活動理論から被害率が高いと予測される職（セールスマンと接客社交従事者）で被害率が高いこと，事業所や不動産を管理する職種（自営，管理職，不動産業者）でも被害率が高いことがわかった．

11　混合システムと事例選定の射程範囲

中澤香世（早稲田大学・名古屋大学大学院）

本論文はアンゴラ，ギニアビセウ，サントメプリンシペにおける内戦勃発の是非の要因を混合システムによって質的に比較分析した．本論文により，混合システムを研究手法として，限定された少数事例の社会現象を質的に奥深く比較分析する場合の一定の条件を明らかにした．

12　保育意識の国際比較分析―ISSP2012 を用いたマルチレベル分析より―

○中西啓喜（早稲田大学）
福田紗耶香（九州大学大学院）

戦後日本の家族形成は，男性が外で働き，女性が家事労働に従事することがステレオタイプとされてきたが，そうした家父長的な家族形成は限界に達しており，女性の社会進出が奨励されている．しかし，長らく家事労働を女性が請け負うことを前提として形成されてきた慣例を変えていくことは難しい．本報告では，ISSP2012（Family and Changing Gender RolesⅣ）のデータ分析から，保育意識の国際的動向を示し，保育意識の「グローバル・スタンダード」を明らかにし，日本の現況を把握する．

JAMS63

13　「規範」としての差別―排外意識高揚の説明の試み―

永吉希久子（東北大学）

排外意識の高揚がなぜ生じたのか，本研究では，差別に関する「記述的規範」と「命令的規範」，潜在的な排外意識と顕在的な排外意識を区別することによって説明を試みる．具体的には，記述的規範の変化によって顕在的な排外意識の高揚が生じるのか，また，メディアがこのプロセスにどのような影響を持つのかを，DIST モデルを拡張したコンピューターシュミレーションを用いて検証する．

14　複数の製造工程を要する製品の製造コストに関するシミュレーション

○藤田旭洋（東京大学大学院）
柳澤大地（東京大学）
西成活裕（東京大学）

完成までに複数の工程を要する製品の製造においては，欠陥品を減らすべく，それまでの工程がミスなく行われているかの検査を適切なタイミングで行う必要がある．しかし，検査の回数が多すぎると不良品の割合は減るが検査を行う為の時間的及び労働力的コストがかかる．この問題に対し，本研究では，一つの製造工程に要する時間と不良品の発生率によって，生産コストを最小にするような検査のタイミングがどのように変化するかをシミュレーションによって考察した．

15　CAPI 型調査における回答時間データの基礎分析

○前田忠彦（統計数理研究所）
稲垣佑典（統計数理研究所）

CAPI 型調査では，設問毎の回答時間の記録を容易に行えることが従来の紙媒体による調査票を使った面接調査に比べて大きな利点となる．ここではその実例としてタブレットを利用した CAPI により実施された 2015 年階層と社会意識全国調査（第 1 回 SSP 調査）を取り上げ，設問毎回答時間の分布についての基礎分析の結果をいくつか紹介する．例えば属性や質問のタイプによる違いなど，極めて基本的な内容に限定する．

16　職業別の男女比はどのように変化するのか―理容師・美容師を事例として―

森田厚（成蹊大学大学院）

男性職域に女性が進出し，女性職域に男性が進出するには，どのような条件が必要かを，理容師・美容師を事例として検討した．これまで，進出に成功した事例は，あまり報告されてない．そこで理容師・美容師について，1970 年以降は国勢調査で，それ以前は史料からの推定を混えて調査した．その結果，理容師における女性の割合は 1930 年に 8.0％であったが，1940 年代から増加し 2010 年は 44.6％となった．美容師における男性の割合は，1930 年に 0.2％であったが，1980 年頃から増加し 2010 年に 23.1％となった．

JAMS33

17　青少年の避妊の実行の規定要因と時代変化―青少年の性行動全国調査の分析―

俣野美咲（武蔵大学大学院）

本報告では，青少年の避妊の実行に影響を及ぼす要因について，家族構造，個人属性，パートナー属性に着目し検討する．「青少年の性行動全国調査」のデータを用いた分析の結果，青少年の初交時の避妊の実行に対しては，家族構造，個人属性，パートナーの属性それぞれが影響を及ぼしているが，これらの影響は時代によって異なることが明らかになった．このことには，近年の性情報へのアクセシビリティの向上や性の日常化が影響しているだろう．

18　退出過程における強引なエージェントの識別方法

○柳澤大地（東京大学）
山崎啓介（産業技術総合研究所）

数理モデルを用いた退出過程のシミュレーションにより，強引なエージェントがいると，出口付近で衝突が起こって総退出時間が長くなってしまうことが分かっている．この成果を実際に応用するためには，強引なエージェントに行動を修正してもらうため，それらを識別できなくてはならない．そこで本研究では，退出過程のシミュレーションデータから強引なエージェントを識別する方法を開発し，エージェント数が 20 程度あれば，10 回程度の観測でほぼ 100% 識別することに成功した．

JAMS63

萌芽的セッション（ポスター報告）II

3 月 15 日（水）9:40〜11:00（第 3 学舎 A204＋2 階ロビー）

1　誰がエシカル消費を嫌うのか—ISSP データによる分析—

朝岡誠（立教大学）

近年，環境や社会に配慮したエシカル消費が着目される一方で，若年層を中心にエシカル消費に対する二極化の傾向がみられつつある（朝岡 2016）．本報告では，ISSP2004 と 2014 のシティズンシップに対する質問や 2008 年 NHK が実施した環境意識調査を用いて，エシカル消費の時系列変化とその規定因を明らかにする．

2　Steam のフレンド機能を介した購買行動の伝播に関するユーザーネットワークからの分析

〇雨宮俊貴（芝浦工業大学）
中井豊（芝浦工業大学）

Steam という 1 億 4000 万人以上のユーザーを抱える巨大な PC ゲームの販売プラットフォーム上では，フレンド機能によりユーザー同士がフレンド関係を構築できる．本研究では，Steam の API を利用して，27000 人以上のユーザー同士のフレンド関係およびユーザーとゲームの所持関係からなる重層的ネットワークを観察した．その結果，例えばフレンド関係の期間が長いほど，同じゲームを所持している傾向にあることがわかった..

3　Kickstarter における支援行動の要因分析

〇大谷仁哉（芝浦工業大学）
中井豊（芝浦工業大学）

クラウドファンディングサイトは, プロジェクトの企画者と支援者からなる資金調達プラットフォームである. 本研究では, その世界最大のサイトである Kickstarter から企画者・支援者 5 万人, プロジェクト 6 万件で構成されるネットワークデータを収集・分析し, プロジェクトに支援が集まる要因を調べた．その結果，企画者が他のプロジェクトを過去に支援したほど，また，過去に支援したプロジェクトが小規模であるほど，資金調達しやすいことが分かった.

4　圏論と社会理論—自己組織性・言語ゲーム論・規範社会学—

大山智徳（日本郵便広島支店）

目的は,圏論が社会理論にとって重要な演繹機能を果たすことを示すことである．方法は随伴によって,自己組織性，言語ゲーム論，規範社会学の定式化と解釈を行う．その結果,自己組織性の二つの意味の導出メカニズムの解明,言語ゲーム論と言語ゲームの双対な作動,規範社会学が随伴の自然言語のように極めて相性がいいこと等がわかった. 萌芽的ではあるが「意味を射とみなす」との解釈は,数理社会学にとって大きな出来事になろう.

JAMSS63

5　相対的剥奪の２つの相―主観的幸福に対する剥奪感と剥奪状態の効果の比較―

神林博史（東北学院大学）

相対的剥奪（RD）の理論的定義は，RD 状態にある個人が剥奪感を有している（剥奪を自覚している）ことを含意している．一方で，実証研究における RD 指標の中には，イツハキ指標のように，剥奪感ではなく客観的な剥奪状態を表現しているものがある．本報告では，剥奪感と剥奪状態の各々について複数の指標を設定し，幸福感・生活満足感・主観的健康など主観的幸福に対する効果を比較することで，RD 指標としての長所と短所を検討する．

6　職業評定における全職業同一評定者の特徴

元治恵子（明星大学）

職業威信スコアは，職業に対する人々の５段階の評定を用いて算出する．各職業に対する評定が，個人内あるいは個人間で異なることにより職業威信スコアに違いが生じ，職業間の関係を１次元的にとらえることが可能となる．しかし，評定者の中には，すべての職業を同一に評定する者も少なからずいる．2015 年に実施された「仕事に関するアンケート調査」のデータを用いて，評定対象となっている職業すべてに同一の評定をする人々が，どのような特徴を持っているのかについて検討する．

7　学校外教育が進学格差に与える影響―傾向スコアを用いた分析―

○眞田英毅（東北大学）
永吉希久子（東北大学）

本研究では，学校外教育を受けることで低階層の子供はより良いランクの高校に進学しやすくなるのかを，学校外教育を「塾・予備校」「家庭教師」「通信教育」に分類した上で検討した．用いたデータは JLPS のパネルデータ，分析方法は傾向スコアである．分析の結果，進学格差解消に貢献しているものは「通信教育」であり，「塾・予備校」や「家庭教師」は効果が確認されなかった．また，「通信教育」を中学３年時に受けていた低階層の子供は大学進学もしやすいことがわかった．

8　ミニマムゲームにおいて修正可能なチープトークの効果

七條達弘（大阪府立大学）
小川一仁（関西大学）
○禿寿（大阪府立大学）

ミニマムゲームでは，複数のナッシュ均衡が存在し，パレート効率な均衡と非効率な均衡がある事が知られている．しかし，実際の実験では，パレート効率的な均衡が成立することはほとんどない．本論文では，9 人一組のミニマムゲームにおいて，パレート効率的な均衡をより多く成立させるための手法を研究した．その結果，各回につき何度でもメッセージを伝えることのできる独特なチープトークを導入させることで，従来の一回きりのチープトークが導入されている場合と比較して，2 倍近くもパレート効率的な均衡を成立させることを示した．

JAMS63

9　大卒者の再入学と職業キャリアに関する基礎分析

髙松里江（立命館大学）

本研究では，大学を卒業したのち改めて別の学校機関へ入学するという，大卒者の再入学を分析対象とする．再入学は，職業キャリアの半ばにおいて新たな知識や技能の獲得を行う機会として職業移動とも関連をもつと考えられるが，その実態については十分に明らかではない．そこで本研究では，2015 年に実施したインターネット調査を用いて，大卒者の再入学と職業キャリアの関連についての基礎分析を行う．

10　選好の変動が就業行動に与える影響

田中茜（東北大学大学院）

本報告では，結婚や出産を機に離職する女性の就業パターンが変化しないメカニズムを，仕事と家庭に関する選好の変動に注目して明らかにする．学卒時や入職前の就業意識が，実際の就業行動に影響を及ぼすことは示されている（西川 2001）．しかし就業意識は周囲の状況によって変化するという指摘がされており（村松 2000），意識の変動と就業行動の関連について検討の余地が残されている．そこで「働き方とライフスタイルに関する全国調査 wave1~7」を用いて，両者の関連を検討した．

11　嫌中・嫌韓の関連要因と担い手の変化：2009 年と 2013 年の比較

田辺俊介（早稲田大学）

本研究は，日本人の抱く対中国・対韓国好感度について，2009 年と 2013 年に行った全国調査データ用いた分析である．具体的には 2 時点間での規定要因（性別・年齢・学歴などの属性要因とともに，ナショナリズムなど社会意識も含めて）の時点間比較を行うことで，尖閣諸島問題・竹島問題などが規定構造にどのような影響を与えたのかを報告する．また嫌中・嫌韓の中核を抽出し，その属性やイデオロギーにも着目している．

12　出身大学の学校歴と専攻分野が初職に与える影響

豊永耕平（東京大学大学院）

本報告の目的は，出身大学の学校歴と専攻分野が初職に与える影響を検討することである．近年では，大卒者内部の質的な差異を説明するのに学校歴だけではなく，専攻分野にも着目する必要性が指摘されている（Fujihara and Ishida 2016）．そこで，本報告では，SSM2015 年調査と過去の SSM 調査を合併した上で，出身大学の学校歴だけではなく，専攻分野が果たす役割も踏まえて大卒者と初職の関連を明らかにする．

JAWS63

13　大卒新卒者の就職活動の長期化とその影響について

松尾寛子（京都大学）

大卒新卒者の採用活動時期は過去 5 年で 3 度の変更があったが，変更の理由としてしばしば「就職活動の長期化」があげられる．本報告では文献調査による過去 20 年の就職活動時期の変化を提示し，長期化の実態に迫る．あわせて，中四国地方にある国立大学の 4 年生を対象に実施した就職活動に関するアンケートの結果から，就職活動期間が就職活動の結果や学生生活とどのように関係しているかについて報告する．

14　異なる情報を持つ人々による群集の暗闇条件下での退出実験

○三好雄介（東京大学大学院）
柳澤大地（東京大学）
西成活裕（東京大学）

災害等緊急時の避難では，多くの場合，出口位置を知っている人と知らない人が視界の悪い中で混在する．しかし，群集内の人々が異なる情報を持ち，かつ視界を制限した条件下での避難に関する研究はあまり取り組まれていない．そこで，本研究では，暗闇の中で群集の一部に出口位置を教えて退出させる実験を行い，全体としての挙動から群集内で異なる情報を持つ者同士がどの様に影響を及ぼし合うかについて，数理モデルを用いたシミュレーションによって考察した．

15　回顧的家族調査 NFRJ-16R によるパネルデータ収集の試み

保田時男（関西大学）

本報告では，1 回の回顧調査により本格的なパネルデータの収集を試みた「青年期から成人期の振り返り調査」（NFRJ-16R）の調査方法と回収状況について速報を行う．コストの面でもデータの質の面でも，多くの場合，パネル調査よりも回顧調査の方が優れていることを主張する．本調査は，特定地域の 35～44 歳の人々，計 2700 名を対象に，15 歳からの家族経験を振り返ってもらった郵送調査である（2017 年 1 月から実施中）．

16　社会階層と統制感―社会的不平等と社会認識の関連についての計量分析―

山口泰史（東京大学大学院・日本学術振興会）

メリトクラシー研究や Locus of Control（Rotter 1966）研究，ひいては社会意識研究によって検討されてきた社会的不平等と社会認識の関連だが，社会構造による外的制約の下でも自身の行動が社会的報酬をもたらすという統制感が社会的不平等の生成･維持において果たす役割の検討は必ずしも十分でない．本報告では，大規模データを用いた成人の計量分析をおこない，その解明を目指す．

JAMSS

17　学歴階層帰属意識の規定要因としての大学進学率と専攻に関する検討

渡辺健太郎（大阪大学）

本研究では，回答者自身の学歴の相対的な位置づけとしての「学歴階層帰属意識」に対する，大学進学率と専攻の効果について検討した．分析は，SSP2015 データを用いて男女別に行った．その結果，大学進学率が高まると，人文社会系学部卒者の学歴階層帰属意識は，理工系学部卒者と比較して低下することが明らかとなった．

JAMS63